

日本スポーツ栄養学会第5回大会を開催して 大会長 同志社大学スポーツ健康科学部 石井好二郎

2018年7月21日(土)～22日(日)に日本スポーツ栄養学会第5回大会が同志社大学今出川キャンパス良心館を会場に開催されました。京都では「祇園祭の頃が一番暑い」と言われており、祇園祭の先祭と後祭の間に開催された大会中の京都の最高気温は38.2℃(7/22)を記録しました。

京都盆地特有の暑さにもかかわらず、1,000名を超える参加者があり、活発な議論が繰り広げられました。会場となった良心館は同志社大学で最も延床面積が広い建物ですが、それすらも狭く感じるほど、各発表会場が参加者の皆様に埋め尽くされていました。



特に、今回、学会大会として初めて採用したポスター発表では、ポスターの前に多くの人だかりができ、発表者と質問者が時間をかけてディスカッションする姿が印象的でした。



懇親会では京都府酒造組合連合会様・伏見酒造組合様のご支援、ご協力で鏡開きが行なわれ、27種類の京都の日本酒が提供されました。



大会 2 日目の FunWalk は京都御苑内の木陰を選んでのコースで、学術的プログラム以外でも京都を感じていただけたことと思います。



大会後、多くの参加者の皆様より、「素晴らしい大会でした」とお褒めの言葉を頂戴し、大会長として安堵の胸を撫で下ろしております。

来年度の第 6 回大会は、東京大学駒場キャンパスにて開催されます。さらに充実し、発展することが期待されます。

最後になりましたが、ご支援、ご協力いただきました、企業・団体、そして皆様に厚く御礼申し上げます。

日本スポーツ栄養学会第5回大会に参加して

帝京大学スポーツ医科学センター

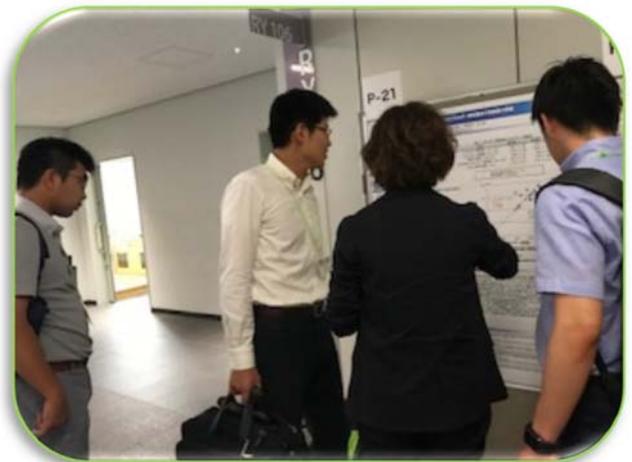
公認スポーツ栄養士

亀本 佳世子

全国で記録的な気温の高さが報じられる中、同志社大学今出川キャンパスにて日本スポーツ栄養学会第5回大会が開催されました（2018年7月21日（土）～22日（日））。大会長である石井好二郎教授（同志社大学）は、学会テーマを「スポーツ栄養：Art, Craft & Science」とし、スポーツ現場から研究まで、どのような場面においても大切な、人間の持つ感性や習性に訴える技（ワザ）や術（スベ）に着目したプログラム構成でした。

シンポジウムでは、国立スポーツ科学センターにおける栄養支援に関して、障がい者アスリート支援の研究と現場サポートに関する内容が印象深かったです。近年、スポーツ栄養士が関わる競技や対象者の幅は広がりを見せており、それと同時に我々スポーツ栄養士に求められる知識の幅も広がっていると感じています。特に障がい者アスリート支援に関する情報は乏しいため、今回のシンポジウムは、エネルギー消費量の考え方から水分補給に関する課題まで、実践的な内容を聴講できる貴重な機会となりました。またスポンサードシンポジウムでは、たんぱく質摂取の考え方やアンチドーピングに関する最新の情報を得ることが出来ました。特にサプリメントに関してドーピング禁止薬物のコンタミネーション率の高さは、後を絶たない「うっかりドーピング」の要因になることを、あらためて確認しました。6月に、スポーツにおけるドーピングの防止活動の推進に関する法律案が国会で成立したことも述べられ、我々スポーツ栄養士における情報の取捨選択能力と、アスリートへ正しく伝えるための「技」と「術」の重要性を考える時間となりました。

一般演題発表は、口頭とポスターの2つの形式で行われました。ポスター発表では、発表者と質問者が活発に意見交換を行い、大変な賑わいをみせていました。自身は口頭発表を行いました。実験方法に関する質問や有用な意見を頂戴することができました。



また学会会場は、1つの建物の2フロア（地下1階、1階）のみと、大変コンパクトであったため、移動がスムーズで快適でした。打ち合わせスペースも充実していたため、情報交換などを行いやすい、明るい雰囲気であったと感じます。

最後に、この度の平成30年7月西日本豪雨の被害に遭われた皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。災害により学会参加を断念された方がいらっしゃるということから、スポーツ栄養士のネットワークを活用し、学会大会参加者が得た知識、情報を積極的に共有していきたいと考えます。

